女子大学生における地域へ復帰した非行少年に対するイメージと性格の関連

The relationship between image of a juvenile delinquent made a comeback to an area and the personality in female university students

松本　千尋
跡見学園女子大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻
Chihiro Matsumoto
Division of Clinical Psychology, Graduate School of Humanities, Atomi University

要　約

本研究の目的は、女子大学生において、性格傾向の違いにより地域へ復帰した非行少年に対するイメージに関連がみられるのかを明らかにすることであった。調査協力者は、X女子大学に通う309名で、質問紙調査を実施した。その結果、５つの群の性格傾向とSD法により測定した地域へ復帰した非行少年に対するイメージとの対するイメージの得点において有意な差は認められなかった。また、SD得点の平均値の比較と自由記述における内容分析を行ったところ、全体的にネガティブなイメージをもつ傾向の可能性があると推察された。有意な差が認められなかった主な要因として、５つの性格傾向の群における人数に偏りが見られたこと、またSD法で用いた一部の形容詞対に地域へ復帰した非行少年をイメージしづらいものがあった可能性のある点が挙げられる。したがって、今後の研究においては、使用する性格尺度やSD法で用いる形容詞対の再検討を行うとともに、非行少年を刺激語として用いる場合には男性の非行少年と女性の非行少年で分けて提示すること、また女子大学生における調査のみならず幅広い年齢層に対しても調査を行う必要があると考える。

【Key Word】非行少年、イメージ、女子大学生

Ⅰ　問題と目的

近代日本において、地域とのつながりの希薄さが社会問題の一つとして指摘されている。それは様々な問題を引き起こす要因となりうるが、その問題の一つに非行が挙げられる。非行は、家庭や学校、地域のそれぞれが抱えている問題が複雑に絡み合って発生している。そのため、これらのより一層の緊密な連携の下に一体的な非行防止と立ち直り支援を推進していく必要があるとされている（子供・若者白書、2017）。非行防止や立ち直り支援を担っているのは法務省に勤める公務員や民間のボランティアである保護司であり、非行少年に関わる人は限られていると言える。しかし、近年特に地域での更生を支える保護司の高齢化が深刻となっている。毎日新聞（2017）によれば、保護司の年齢構成は50歳以上が全

体の95.4%を占めており、そのうちの約半数以上が10年以内に定年などで辞めるとみられ、保護司制度自体の存続が危ぶまれているのが現状である。これは今まで以上に民間の人々の協力が求められていると言えよう。しかしながら、地域で発生する犯罪や非行はまさしく地域の問題であり、そして地域の住民でもある犯罪や非行を行った人の再犯を防止し、健全な社会の一員として受け入れていくということも同じく地域の問題なのであるにもかかわらず、国民の意識の中には未だ犯罪や非行が地域社会の問題として捉えることが難しい様子が見える（長谷川、2010)。大庭（2010）は、非行・犯罪についてのイメージはほぼメディアによって構築されており、そのメディアにおいて構築された犯罪や犯罪者に対して人々は非難し、自らの犯罪に関するリアリティをつくりだしているという問題意識の下に、少年へのまなざしの変化と厳罰主義について議論している。その結果、犯罪ニュースにおいては、報道される罪種が「凶悪化」すると同時に、犯罪を引き起こす少年イメージが「一般化」されるようになったこと、また犯罪事件を引き起こす人間に対する厳罰化を求める風潮も、このようなメディアにおける犯罪・非行のイメージの構築と無縁ではないことを報告している。このことは、犯罪を行った人や非行少年に対する誤ったイメージを助長させることにつながりうると考えられると共に、イメージというものがいかに人々の中に浸透しやすく、且つ影響を与えやすいかを物語っているといえる。加えて、このことが一要因となり犯罪や非行への否定的なイメージが助長されることで、より一層あたかも自分とは全く関係のないかのような話に感じられるのではないかと考えられる。

地域へと復帰した非行少年に対するイメージを明らかにすることにより、青年期女子における非行に対するイメージの特徴、また性格との関連を検討することで性格傾向によるイメージの違いを知り、非行少年に対する地域での関わりにおいての一つの参考となると考える。

そこで本研究においては、地域に復帰した非行少年へのイメージの調査を行い、青年期女子がどのようなイメージを抱いているのか、また性格傾向の違いが地域へと復帰した非行少年へのイメージに対してどのような影響を与えているのを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ　方法

1．対象者

関東圏内のX女子大学の学生309名に質問紙を配布し、回答が得られた。回答に不備があったものを除き、260名を分析の対象とした。講義終了後に研究者が口頭で本研究の趣旨と同意について説明を行い、質問紙に本研究の趣旨と同意について説明した文書を明記した。同意書への署名がかえって個人情報の収集となる可能性を考慮し、無記名の質問紙の提出をもって調査についての同意を得たと判断した。

2．調査時期

2019年７月に調査を行った。

3．質問紙内容

（1）説明文書

本研究の目的、質問内容、倫理的配慮、

研究者への連絡先について記載した。

（2）フェイスシート

年齢、学年、学科について尋ねた。

（3）自由記述

地域に復帰した非行少年に対するイメージを尋ねた。教示文は「自分の住む地域に少年院から退所してきた少年がやってきたことを知った時、あなたはどのようなイメージを持つでしょうか。思い浮かんだことを以下の枠内に自由に記述してください。」とした。

（4）SD法

Osgoodらの研究（心理学実験指導研究会、2015　a : b）において重要とされた“評価性因子”、“力量性因子”、“活動性因子”のいずれかに属し、且つこれまでの研究において印象形成の測定に有効とされる形容詞対が含まれるように構成した計12項目からなり、5件法で評定を求めた。“評価性因子”には、“容易な～困難な”、“危ない～安全な”、“ひどい～立派な”、“よい～わるい”が属す。“力量性因子”には、“力のある～力のない”、“強い～弱い”、“緊張した～緩んだ”、“広がりのない～広がりのある”が属し、“活動性因子”には、“荒い～繊細な”、“地味な～派手な”、“積極的な～消極的な”、“静かな～騒がしい”が属す。質問紙には、「地域に復帰した非行少年について、以下の項目はあなたにとってどの程度あてはまるでしょうか。もっともあてはまると思うものの縦線の箇所に○をつけてください。」と教示した。Table 1に12項目の形容詞対を示す。

（5）Big Five尺度（和田、1996）

性格特性を測定する尺度であり、“外向性因子”、“情緒不安定性因子”、“開放性因子”、“誠実性因子”、“調和性因子”の基本5次元から構成された計60項目からなり、7件法で評定を求めた。質問紙には、「以下のそれぞれの項目は、あなた自身にどれくらいあてはまりますか。7（非常にあてはまる）から1（全くあてはまらない）までのうちで、自分にもっともあてはまると思うところの数字に○をつけてくださ

Table 1　12項目の形容詞対

形容詞対		
01. 容易な	－－－－	困難な
02. 荒い	－－－－	繊細な
03. 地味な	－－－－	派手な
04. 力のある	－－－－	力のない
05. 危ない	－－－－	安全な
06. 積極的な	－－－－	消極的な
07. ひどい	－－－－	立派な
08. 静かな	－－－－	騒がしい
09. 強い	－－－－	弱い
10. 緊張した	－－－－	緩んだ
11. よい	－－－－	わるい
12. 広がりのない	－－－－	広がりのある

い。」と教示した。また、質問紙を配る際に口頭においても「Ⅲの性格についてうかがう質問項目にお答えいただく際の注意点として、左が非常にあてはまる、右が全くあてはまらないとなっていますので気をつけてください」と伝えた。

（6）統計解析

本研究の目的である、女子大学生における地域へ復帰した非行少年に対するイメージが性格傾向と関係しているのかについて解析を行った。分析ソフトはIBM SPSS Statisticsを用いた。女子大学生をそれぞれBig Five尺度における５次元の中で最も優位な性格特性に群分けし，その次元ごとにSD法の得点と一要因分散分析を用いて検討を行った。

４．倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科倫理委員会にて承認を得た（受付番号：19-013）。

Ⅲ　結果

１．対象者の特性

関東圏内のX女子大学の学生309名を対象として質問紙を配布した。その中から回答に不備のなかった260名を分析対象とした。

以下にフェイスシートの結果を示す。

対象者の年齢は、18歳121名（46.5%）、19歳109名（41.9%）、20歳26名（10%）、21歳２名（0.8%）、24歳１名（0.4%）、無記名１名（0.4%）であった。対象者の学年は、１年生56名（21.5%）、２年生204名（78.5%）であった。対象者の所属する学科は、現代文化表現学科21名（8.0%）、人文学科30名（11.5%）、マネジメント学科15名（5.8%）、コミュニケーション文化学科17名（6.5%）、コミュニケーションデザイン学科32名（12.3%）、観光デザイン学科25名（9.6%）、臨床心理学科名107（41.2%）、生活環境マネジメント学科12名（4.6%）、無記名１名（0.4%）であった。

２．一要因分散分析

性格傾向が混合した対象者を除いた、外向性優位群、情緒不安定性優位群、開放性優位群、誠実性優位群、調和性優位群の５つの群からのSD得点への影響を一要因分散分析を用いて検定したが、有意差は認められなかった（$p>0.05$）。Table 2とTable 3にその結果の表を示した。

Table 2　５つの群における一要因分散分析の結果

	平均値	標準偏差	F値	有意差
外向性優位群	2.83	0.56	0.36	いずれも有意差なし
情緒不安定性優位群	2.79	0.54		
開放性優位群	2.93	0.25		
誠実性優位群	2.9	0.35		
調和性優位群	2.72	0.6		

Table 3　5つの群における12の形容詞対との一要因分散分析の結果

	外向性優位群	情緒不安定性優位群	開放性優位群	誠実性優位群	調和性優位群	有意差
容易な～困難な	2.42	2.25	3.06	2.71	2.25	いずれも有意差なし
荒い～繊細な	2.24	2.51	2.76	2.71	2.33	
地味な～派手な	3.69	3.54	3.24	3.29	3.61	
力のある～力のない	3.49	3.60	3.29	3.43	3.58	
危ない～安全な	2.16	2.05	2.53	2.43	1.97	
積極的な～消極的な	3.31	3.18	3.12	3.29	3.00	
ひどい～立派な	2.36	2.40	2.82	2.57	2.22	
静かな～騒がしい	2.58	2.66	2.94	2.71	2.53	
強い～弱い	3.53	3.47	3.12	3.29	3.56	
緊張した～緩んだ	3.04	2.70	2.65	2.71	2.72	
よい～わるい	2.29	2.28	2.65	2.57	2.11	
広がりのない～広がりのある	2.89	2.79	2.94	3.14	2.81	

3．SD得点の平均値の比較

平均値を比較したところ以下の傾向が見られた。

（1）外向性優位群におけるSD得点平均値の比較

“困難な～容易な”の形容詞対においては、“困難な”に近いイメージを、“荒い～繊細な”の形容詞対においては、“荒い”に近いイメージをもつ傾向が示された。“地味な～派手な”の形容詞対においては、“派手な”に近いイメージを、“力のない～力のある”の形容詞対においては、“力のある”に近いイメージをもつ傾向が示された。“危ない～安全な”の形容詞対においては、“危ない”に近いイメージを、“消極的な～積極的な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“積極的な”に近いイメージをもつ傾向が示された。“ひどい～立派な”の形容詞対においては、“ひどい”に近いイメージを、“騒がしい～静かな”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“騒がしい”に近いイメージをもつ傾向が示された。“弱い～強い”の形容詞対においては、“強い”に近いイメージを、“緊張した～緩んだ”の形容詞対においては、どちらでもないに近いイメージをもつ傾向が示された。“わるい～よい”の形容詞対においては、“わるい”に近いイメージを、“広がりのない～広がりのある”の形容詞対においては、どちらでもないに近いイメージをもつ傾向が示された。図１にその結果示した。

（2）情緒不安定性優位群におけるSD得点平均値の比較

“困難な～容易な”の形容詞対においては、“困難な”に近いイメージを、“荒い～繊細な”の形容詞対においては、“荒い”

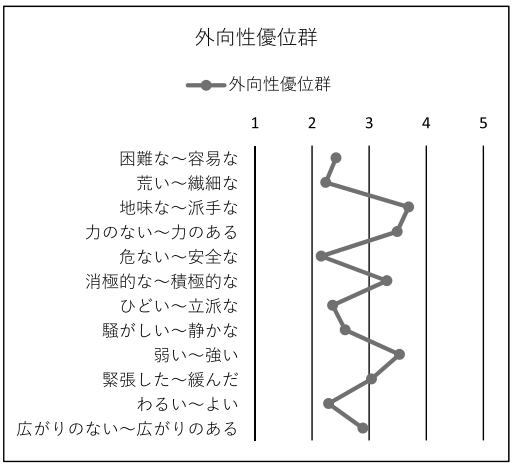


図１　外向性優位群におけるSD得点の平均値のグラフ（N＝45）

に近いイメージをもつ傾向が示された。“地味な～派手な”の形容詞対においては、“派手な”に近いイメージを、“力のない～力のある”の形容詞対においては、“力のある”に近いイメージをもつ傾向が示された。“危ない～安全な”の形容詞対においては、“危ない”に近いイメージを、“消極的な～積極的な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“積極的な”に近いイメージをもつ傾向が示された。“ひどい～立派な”の形容詞対においては、“ひどい”に近いイメージを、“騒がしい～静かな”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“騒がしい”に近いイメージをもつ傾向が示された。“弱い～強い”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの“強い”に近いイメージを、“緊張した～緩んだ”の形容詞対においては、どちらでもないに近いものの、“緊張した”に近いイメージをもつ傾向が示された。“わるい～よい”の形容詞対においては、“わるい”に近いイメージを、“広がりのない～広がりのある”の形容詞対においては、どちらでもないに付近に位置するものの、“広がりのない”に近いイメージをもつ傾向が示された。図２にその結果示した。

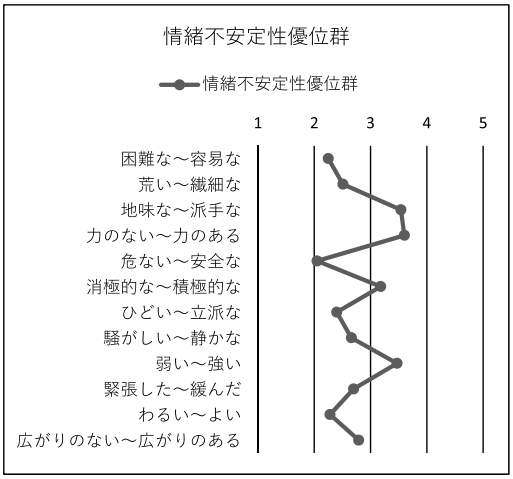


図２　情緒不安定性優位群におけるSD得点の平均値のグラフ（N＝141）

（３）開放性優位群におけるSD得点平均値の比較

“困難な～容易な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置し、“荒い～繊細な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“荒い”に近いイメージをもつ傾向が示された。“地味な～派手な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“派手な”に近いイメージを、“力のない～力のある”の形容詞対においても、どちらでもない付近に位置するものの、“力のある”に近いイメージをもつ傾向が示された。“危ない～安全な”の形容詞対においては、“危ない”に近いイメージを、“消極的な～積極的な”の形容詞対においては、どちらでもないイメージをもつ傾向が

示された。“ひどい～立派な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“ひどい”に近いイメージを、“騒がしい～静かな”の形容詞対においては、どちらでもないに近いイメージをもつ傾向が示された。“弱い～強い”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“強い”に近いイメージを、“緊張した～緩んだ”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“緊張した”に近いイメージをもつ傾向が示された。“わるい～よい”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“わるい”に近いイメージを、“広がりのない～広がりのある”の形容詞対においては、どちらでもないに近いイメージをもつ傾向が示された。図３にその結果示した。

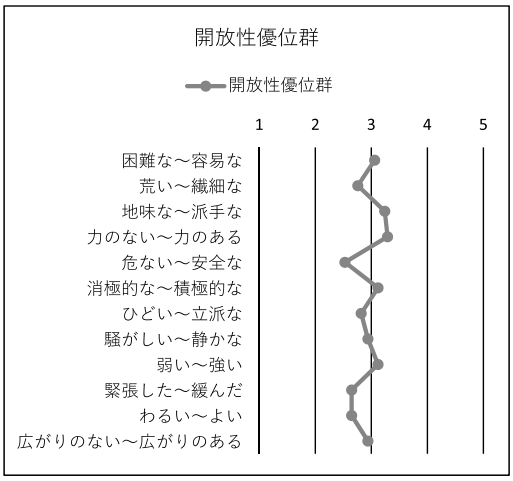


図３　開放性優位群におけるSD得点の平均値のグラフ（N＝17）

（４）誠実性優位群におけるSD得点平均値の比較

“困難な～容易な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“困難な”に近いイメージを、“荒い～繊細な”の形容詞対においても、どちらでもない付近に位置するものの、“荒い”に近いイメージをもつ傾向が示された。“地味な～派手な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“派手な”に近いイメージを、“力のない～力のある”の形容詞対においても、どちらでもない付近に位置するものの、“力のある”に近いイメージをもつ傾向が示された。“危ない～安全な”の形容詞対においては、“危ない”に近いイメージを、“消極的な～積極的な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“積極的な”に近いイメージをもつ傾向が示された。“ひどい～立派な”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“ひどい”に近いイメージを、“騒がしい～静かな”の形容詞対においても、どちらでもない付近に位置するものの、“騒がしい”に近いイメージをもつ傾向が示された。“弱い～強い”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“強い”に近いイメージを、“緊張した～緩んだ”の形容詞対においても、どちらでもない付近に位置するものの、“緊張した”に近いイメージをもつ傾向が示された。“わるい～よい”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“わるい”に近いイメージを、“広がりのない～広がりのある”の形容詞対においても、どちらでもない付近に位置するものの、“広がりのある”に近いイメージをもつ傾向が示された。図４にその結果示した。

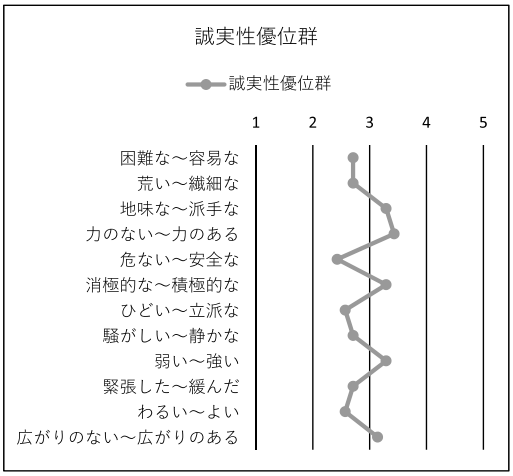


図４　誠実性優位群におけるSD得点の平均値のグラフ（N＝７）

（５）調和性優位群におけるSD得点平均値の比較

“困難な～容易な”の形容詞対においては、“困難な”に近いイメージを、“荒い～繊細な”の形容詞対においては、“荒い”に近いイメージをもつ傾向が示された。“地味な～派手な”の形容詞対においては、“派手な”に近いイメージを、“力のない～力のある”の形容詞対においては、“力のある”に近いイメージをもつ傾向が示された。“危ない～安全な”の形容詞対においては、“危ない”に近いイメージを、“消極的な～積極的な”の形容詞対においては、どちらでもないに近いイメージをもつ傾向が示された。“ひどい～立派な”の形容詞対においては、“ひどい”に近いイメージを、“騒がしい～静かな”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“騒がしい”に近いイメージをもつ傾向が示された。“弱い～強い”の形容詞対においては、“強い”に近いイメージを、“緊張した～緩んだ”の形容詞対においては、どちらでもないに近いイメージをもつ傾向が示された。“わるい～よい”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“わるい”に近いイメージを、“広がりのない～広がりのある”の形容詞対においては、どちらでもない付近に位置するものの、“広がりのある”に近いイメージをもつ傾向が示された。図５にその結果示した。

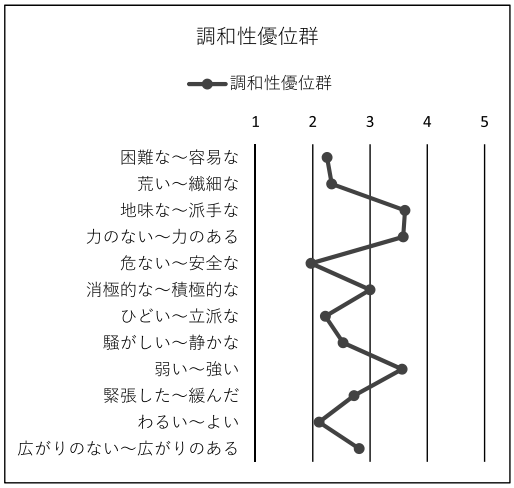


図５　調和性優位群におけるSD得点の平均値のグラフ（N＝36）

（６）５つの群におけるSD得点平均値の比較

“困難な～容易な”の形容詞対においては、開放性優位群がよりどちらでもないに近く、情緒不安定性優位群と調和性優位群がより困難なイメージに近い傾向が示された。“荒い～繊細な”の形容詞対においては、全体的にどちらでもないよりであるものの“荒い”よりに位置し、開放性優位群がどちらでもないに近く、外向性優位群がより荒いイメージに近い傾向が示された。“地味な～派手な”の形容詞対においては、全体的にどちらでもないよりであるものの“派手な”方に位置し、開放性優位群

がどちらでもないに最も近く、外向性優位群が“派手な”イメージにより近い印象をもつ傾向が示された。“力のない～力のある”の形容詞対においては、全体的にどちらでもないよりであるものの“力のある”側に位置し、開放性優位群はよりどちらでもないに近く、情緒不安定性優位群がより“力のある”イメージをもつ傾向が示された。“危ない～安全な”の形容詞対においては、全体的にどちらでもない～“危ない”側に位置し、開放性優位群がどちらでもないにより近く、調和性優位群がより“危ない”イメージにより近い印象をもつ傾向が示された。“消極的な～積極的な”の形容詞対においては、全体的にどちらでもないに近く位置するものの、調和性優位群がどちらでもないに位置し、外向性優位群が“積極的な”に近いイメージをもつ傾向が示された。“ひどい～立派な”の形容詞対においては、全体的にどちらでもない付近に位置するものの、開放性優位群がどちらでもないにより近く、調和性優位群がより“ひどい”イメージに近い傾向が示された。“騒がしい～静かな”の形容詞対においては、全体的にどちらでもない付近に位置するものの、開放性優位群がどちらでもないにより近く、調和性優位群がより“騒がしい”イメージをもつ傾向が示された。“弱い～強い”の形容詞対においては、全体的にどちらでもないよりに位置するものの、開放性優位群がどちらでもないにより近く、調和性優位群が“強い”イメージにより近く位置する傾向が示された。“緊張した～緩んだ”の形容詞対においては、全体的にどちらでもない付近に位置し、群によってはイメージの傾向が近いものがあるものの、外向性優位群がよりどちらでもないに近く、開放性優位群が“緊張した”イメージに近く位置する傾向が示された。“わるい～よい”の形容詞対においては、全体的にどちらでもない～“わるい”側に位置し、開放性優位群がどちらでもないにより近く、調和性優位群がより“わるい”イメージに近い傾向が示された。“広がりのない～広がりのある”の形容詞対においては、全体的にどちらでもない付近に位置するものの、誠実性優位群がより“広がりのある”側に近く位置し、外向性優位群が“広がりのない”側に近いイメージをもつ傾向が示された。また全体を通してみると、SD法における地域へ復帰した非行少年に対するイメージの傾向は特に“荒い”、“派手な”、“力のある”、“危ない”、“ひどい”、“騒がしい”、“強い”、“わるい”に近いことが示された。図６にその結果を示した。

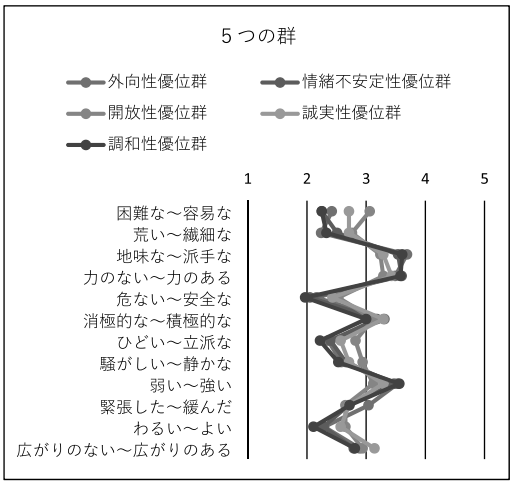


図６　５つの群におけるSD得点の平均値のグラフ（N＝246）

4．地域へ復帰した非行少年に対するイメージについての自由記述の内容分析

「自分の住む地域に少年院から退所してきた少年がやってきたことを知った時、あなたはどのようなイメージを持つでしょうか。思い浮かんだことを以下の枠内に自由に記述してください。」から、241名の自由記述が得られ、その記述内容を細分化して359個とし、グループ化を行った。まず、359個の情報を整理・結合し5つの大グループ「ネガティブなイメージ」「ポジティブなイメージ」「関心がある」「無関心」「その他」に分けた。大グループ「ネガティブなイメージ」は、3つの中グループ「接触拒否」「恐怖」「穏やかでない」に分けた。また、大グループ「ポジティブなイメージ」は、3つの中グループ「励まし」「肯定」「交流」に分けた。そして、大グループ「関心がある」は4つの中グループ「背景」「矯正」「人物像」「罪状」に分けた。また、中グループ「穏やかでない」は3つの小グループ＜疑心＞＜気がかり＞＜悪者＞に分けた。その結果を図式化したものをTable 4に示した。

Ⅳ　考察

1．対象者の特性についての考察

対象者の年齢は、18歳121名（46.5%）、19歳109名（41.9%）の2つの年齢が特に多く、10代後半の年代が8割以上を占めていることがわかった。このことから、今回の研究においては主に10代後半の女性の非行少年に対するイメージが明らかになると考えられる。また、対象者の所属する学科の中においては、臨床心理学科に所属する107名（41.2%）が最も多く、半数近くを占めていることが分かった。

2．一要因分散分析の考察

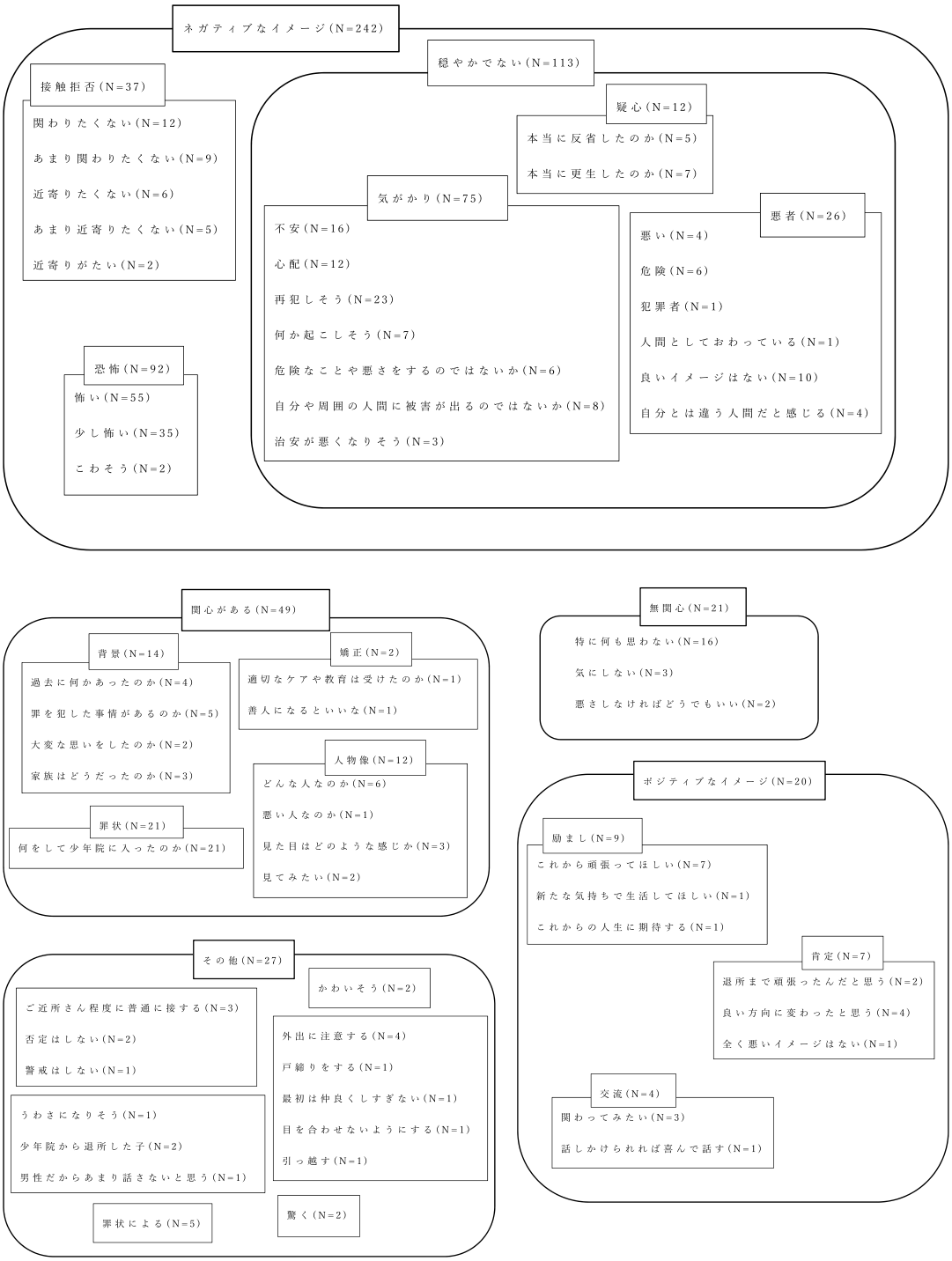
性格傾向の違いと地域へ復帰した非行少年に対するイメージの関連について検討した。その結果、有意な差は認められなかった。その要因の1つとして考えられるものに、5つの性格傾向の群における偏りが考えられる。今回5つの性格傾向を外向性優位群、情緒不安定性優位群といったように群分けし、5つの性格傾向の中で最も高い数値が出たものをその人の性格傾向優位群として振り分けを行った。その振り分けの結果、外向性優位群は45名、情緒不安定性優位群は141名、開放性優位群は17名、誠実性優位群は7名、そして調和性優位群は36名となった。特に最も対象者の集まった情緒不安定性優位群が141名なのに対し、誠実性優位群は7名と人数の差が大きく開いていた。このような偏りが検定の結果にも影響したのではないかと考えられる。加えて、今回のSD法において用いた形容詞対の中で、一部のものが地域へ復帰した非行少年をイメージする際に想像しにくいものだった可能性も考えられる。例えば、“危ない～安全な”のように地域へ復帰した非行少年という刺激文に比較的あてはめやすい形容詞対もあれば、“広がりのある～広がりのない”のようにあてはめにくいものもあったのではないかと推察される。

3．SD得点平均値の考察

（1）外向性優位群

外向性優位群におけるSD得点の平均値の傾向について検討した。その結果、自分の関心等が外の人や物に向けられる傾向の

Table 4　地域へ復帰した非行少年に対するイメージについての自由記述の内容分析



ある外向性優位群においては、特に「荒く、派手で危険、ひどい、わるい」イメージをもつ傾向が示された。このことから、外向性優位群においては地域へ復帰した非行少年に対して荒々しさや派手な姿を想像し、ひどい、わるい、危険といったネガティブなイメージをもつ傾向があると考えられる。

（2）情緒不安定性優位群

情緒不安定性優位群におけるSD得点の平均値の傾向について検討した。その結果、感情面や情緒面において不安定な傾向のある情緒不安定性優位群においては、地域へ復帰した非行少年に対して特に「困難で、派手な、力があり危険、ひどい、わるい」イメージをもつ傾向が示された。このことから、情緒不安定性優位群においては地域へ復帰した非行少年に対して派手で力のある印象があり、且つ難しさや危険、ひどい、わるいといったネガティブなイメージをもつ傾向があると考えられる。

（3）開放性優位群

開放性優位群におけるSD得点の平均値の傾向を検討した。その結果、新たな文化的、知的な経験等に開放的な傾向のある開放性優位群においては、地域へ復帰した非行少年に対して全体的にどちらでもないという印象をもつものの、特に「危ない」イメージをもつ傾向が示された。このことから、開放性優位群においては地域へ復帰した非行少年に対して危険といったネガティブなイメージをもつ傾向があると考えられる。

（4）誠実性優位群

誠実性優位群におけるSD得点の平均値の傾向について検討した。その結果、計画性や責任感があり、勤勉性の傾向のある誠実性優位群においては、地域へ復帰した非行少年に対して全体的にどちらでもない印象をもつものの、特に「危ない」イメージをもつ傾向が示された。このことから、誠実性優位群においては地域へ復帰した非行少年に対して危険といったネガティブなイメージをもつ傾向があると考えられる。

（5）調和性優位群

調和性優位群におけるSD得点の平均値の傾向について検討した。その結果、協調的に行動できる傾向のある調和性優位群においては、地域へ復帰した非行少年に対して特に「困難な、荒い、派手で力のあり、危ない、ひどい、強い、わるい」イメージをもつ傾向が示された。このことから、調和性優位群においては地域へ復帰した非行少年に対して荒さや派手さ、強い印象をもち、難しさや危なさ、ひどい、わるいといったネガティブなイメージをもつ傾向があると考えられる。

（6）５つの群

５つの群をまとめてみると、どの群においても特に危ないというイメージをもつ傾向があると考えられる。また、全体を通してみるとどの群も地域へ復帰した非行少年に対してネガティブなイメージをもつ傾向があると考えられ、非行少年に対するイメージ像は、荒々しさや派手さや強いイメージの傾向から周囲と比べて目立つ存在であり、困難さや危なさをもつ悪いイメージを想像しやすいのではないかと考えられる。

３．内容分析の考察

女子大学生における地域へ復帰した非行

少年に対するイメージとして見いだされたものは、主に「ネガティブなイメージ」「ポジティブなイメージ」「関心がある」「無関心」の4つであった。その中でも「ネガティブなイメージ」は最も多く、恐怖心や不安感を抱く傾向が特に強いことが明らかとなった。再犯を危惧するものや、関わりたくない、近付きたくないと記述した者も多く、中には極端に否定的な見方をする者もおり、非行少年に対する否定的な見方の根強さもうかがえた。こういったネガティブなイメージの背景には、非行少年についてよくわからない故にその曖昧さが怖さにつながっているのではないかと考えられる。今回非行少年がどのような罪を犯して少年院へ入所したのか、また過去に何があったのか、どのような人物像なのかといったように非行少年の背景や罪を犯すに至った理由に焦点を当てる記述も一定数見られた。このことから、非行少年についてよくわからないからこそ知ろうとする姿勢を見せる者もいるのではないかと推察される。逆に関心があるグループと比べて半数以下ではあるものの、非行少年に対して特に何も思わず関心の見られない記述も見られた。このことから、非行少年の存在する世界を非日常性の強いものとして捉えている可能性のある者もいるのではないかと考えられる。

その他のグループにおいては、地域において非行少年との多少の接触を想定している者もいれば、接触を避けるために自分はどうするかについて想像する者もいた。これは、何かをイメージする際にまず最初にその人の焦点の方向が他者へ向くか自らへ向くかの違いがあるのではないかと考えられる。また、他にも非行少年に対しての同情の声もあれば、驚く者、非行少年の罪状によって考えると記述した者もいた。このように様々な記述が得られたものの、その中で男性だからあまり話さないと思うと記述した者もいた。このことから、質問紙調査票の表紙には非行少年の定義を記載したものの、非行少年は男性だけが該当すると想像した者が他にもおり、男性の非行少年に対するイメージについて答えた者が少なからずいるのではないかと推察される。

ポジティブなイメージについては、大グループの中で最も回答者が少ないものの記述した者はいた。内容としては頑張れといった励ましの声や少年院での生活の中で非行少年が良い方向に変わったのではないかと期待する者、また関わりを持ってみたいと記述する者もいた。このことから、ネガティブなイメージをもつ傾向が多い中にも非行少年に対する前向きなイメージは少なからずあり、こうしたイメージをもつ機会が増えることで非行少年が地域へと復帰しやすくなる要因の1つになるのではないかと考えられる。

4．まとめ

今回対象者の性格と地域へ復帰した非行少年に対するイメージとの関連を検討したところ、有意な差は認められないという結果になった。その要因の1つとしてBig Five尺度の5つの因子を5つの優位な性格傾向の群として分けた際に生じた対象者の人数の偏りによる影響が考えられる。またSD法で用いた形容詞対に一部地域へ復帰した非行少年をイメージしにくいものが含まれていた可能性も要因の1つとして考え

られる。

SD得点の平均値の比較と自由記述における内容分析を行ったところ、全体を通して地域へ復帰した非行少年に対するイメージはネガティブなものが多い傾向が明らかになった。SD得点の平均値の比較においては、どの群においても危ないイメージをもつ傾向があることが推察された。また、自由記述の内容分析においてもポジティブなイメージは少なからずあるものの、ネガティブなイメージが最も多く、中でも非行少年に対して怖さや不安のイメージをもつ者が多い傾向にあった。このことは、非行少年の背景や人物像について関心があるという記述があったことも踏まえて考えると、非行少年という存在がどういうものなのか、またその人物像が容易にイメージしづらいためにそのことが怖さや不安につながっているのではないかと考える。

5．本研究の限界と今後の展望

本研究では、女子大学生における性格と地域へ復帰した非行少年に対するイメージとの関連を検討したが有意な差は認められなかった。この要因の１つとしてBig Five尺度における５つの因子の群分けの際にそれぞれの群での人数に偏りが見られたことを述べたが、今後性格との関連を研究する際には別の性格尺度を用いて検討する必要があるのではないかと考えられる。また、自由記述において非行少年に該当するのは男性のみであると想像する者がいる可能性が示唆されたため、男性の非行少年と女性の非行少年をそれぞれ別にしてイメージをうかがう必要がある。加えて、今回の調査は20代前半の女子大学生を対象に行ったが、今後は幅広い年齢層に対して検討していく必要があると考えられる。

謝辞

ご指導いただきました野島一彦先生、並びにご協力いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。

引用文献

長谷川洋昭（2010）．更生保護における犯罪予防活動の進展–雑誌『更生保護』に見る「社会を明るくする運動」–　田園調布学園大学紀要，５，257–276.

久原恵理子・宮寺貴之・藤原佑貴・小林寿一（2016）．非行少年の指導に対して教師が抱くイメージの特徴について－態度や共感性との関連から－　犯罪心理学研究，53（2），43–57.

法務省法務総合研究所（編）（2017）．犯罪白書～更生を支援する地域のネットワーク～　昭和情報プロセス株式会社

生島　浩（1993）．非行少年への対応と援助　金剛出版

井上正明・小林利宣（1985）．日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観，教育心理学研究，33（3），253–260.

石井小夜子・坪井節子・平湯真人（2001）．新版少年法・少年犯罪をどう見たらいいのか―厳罰化・刑事裁判化は犯罪を抑止しない　明石書店

覚正豊和・矢作由美子・横山　潔（2017）．非行少年の立ち直り支援児童自立支援施設における自立支援の現状と課題民官連携：児童自立支援施設と児童養護施設の連携と取り組みから，109–121.

香曽我部琢・橋本麻美・阿部晴佳（2015）．保育室の壁面装飾に関する意識と方略：保育室の壁面色彩についてのSD法とPAC分析による混合研究法の試み　宮城教育大学情報処理センター研究紀要，22，15-23.

河野荘子・岡本英生（編）（2013）．コンパクト犯罪心理学－初歩から卒論・修論作成のヒントまで－　北大路書房

河合隼雄（1995）．河合隼雄著作集第７巻　子どもと教育　岩波書店

毎日新聞（2017）.10年で半減へ　高齢化で定年、人材確保見通せず，11―17.

日本子どもを守る会（編）（2017）．子ども白書　本の泉社

日本家族心理学会（編）（2010）．家族にしのびよる非行・犯罪―その現実と心理援助　金子書房

西村春夫（1991a）．能動的非行少年のイメージ－非行理論における「ダメな少年」イメージの転換－　比較法制研究，14，81-25.

西村春夫（1982b）．社会各層の少年非行観の比較分析　科学警察研究所報告，23（1），９-27.

西村春夫（1983c）．社会各層の少年非行観の比較分析　科学警察研究所報告，24（1），44-62.

内閣府（2017）．子供・若者白書第３章困難を有する子供・若者やその家族の支援第２節困難な状況ごとの取組，94-107.

岡田至雄・安藤仁朗（1994）．犯罪および犯罪者に関するイメージの研究　関西大学社会学部紀要，26（2），１-29.

岡本英生（1997）．非行少年の少年院収容者についてのイメージ　犯罪心理学研究，35（2），15-27.

岡本茂樹（2013）．反省させると犯罪者になります　新潮社

大庭絵里（2010）．メディア言説における「非行少年」観の変化　国際経営論集，39，155-164.

心理学実験指導研究会（編）（2015a）．実験とテスト＝心理学の基礎，実習編．培風館．77-79.

心理学実験指導研究会（編）（2015b）．実験とテスト＝心理学の基礎，解説編．培風館．154-157.

館野一宏・兒玉憲一（2008）．犯罪者の家族のイメージと体験の分析　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，７，61-74.

都島梨紗（2013）．少年院における非行少年の変容―少年院教育と非行仲間との連続性に着目して―，教育社会学研究，92，175-195.

吉原直樹・近森高明（編）（2013）．都市のリアル　有斐閣